



麦笛

32号

2020年8月15日

発行

東京尊商會広報委員会

発行人

村井 健 (51期)

〒

勤務先

TEL

E-mail

同窓の絆

なります。東京尊商會は今後も継続し進んでいきます。今年にはコロナ禍で止む無く「休会」とするものです。

今年は、来年の東京尊商會創立70周年への「充電の年」に

東京尊商會は、昭和26年（1951年）の設立で、来年、本会設立は、厳しい状況下で

大変ご苦労があったと聞いております。諸先輩が営々と歴史を築いてこられました。いまこの伝統ある本会を担う私たちとしては、来年の70周年を乗り越えたいと思っております。元氣よく創立70周年を迎えるため、今年には休会して「充電の年」にするとう。前向きに考えていきましょう。

東京尊商會總會 同窓の絆 休会

東京尊商會會長

49期 小野政春



残暑厳しき折から、皆様お障りもなくお過ごしのことと存じます。

例年ですと、盆踊りの歌が聞こえたり、また虫の音が秋を感じさせる朝夕ですが、100年に一度と言われる新型コロナウイルス感染症に世界が悩まされ、社会が、経済が一変しようとしております。

今年の「同窓の絆」は、休会としますことをご報告申し上げます。

外出の自粛や移動制限などは、緩和されましたが「新し

い生活様式」で、相変わらずマスクの着用、手洗い、手指消毒、三密の回避などが、求められております。いつになつたら「感染拡大」の不安が払拭されるのでしょうか。

そんな状況下で、10月20日予定の開催可否を考えるのは、正直難しいことでしたが、結論として今年の「同窓の絆」は休会とさせていただきます。

役員各位の意見には、規模縮小して同日開催、開催日を延期、ITオンラインで5会場同時開催など多様な意見を頂戴しましたが、大勢は「中止」でした。

貴重な意見を基にして、私を含め幹部役員で協議し成案を得ました。ご了承のほどお願い申し上げます。

〈主な休会理由〉

1、現時点でコロナ禍は、「終息」せず、せめて「収束」の見込みがあつて欲しいが無い。
2、飲食・懇談が目的である総会で「三密厳守」は、難しい。仮に、出来ても寂しいものになる。

3、参加者に高齢者が多く、また既往疾患もおられ、万一の事態は、考えるべき。
4、インフルエンザ時期に入るので、慎重を期すべき。
5、ワクチンなど治療薬が出ていない。

「中止」では、なく「休会」

今年の「同窓の絆」は、単なる「中止」ではありません。「中止」とした場合、「後」がなくこれまで、継続・進めてきた行事・仕事・計画を「取り止める」と言う印象が強

母校・小樽、振り返つての87年

36期 藤田賢治



19歳の藤田さん

母校が106年の歴史に幕を閉じるのは、残念でなりません。この度東京尊商會役員退任にあたり、私の思いを少々お話しします。私は、この会にかかわつて25年になりました。まず、故近藤会長、古山元会長、島元会長、澤山元会長、中村元会長、小野会長、それ

ぞれの個性を発揮し、幹事の方々と年7回もの打ち合わせをして、年一度の総会を成功させて来ましたが、心より感謝申し上げます。また、会運営にあたり長期間ご寄付を

いただいた故保志様、本会運営のアドバイザー的役割を果たしてくれた島さんには、特に感謝申し上げます。女性の幹事の方々が会の運営に当たり、気配りをしていただいたことにお礼を申し上げます。

さて、私が昭和20年、終戦の年に12歳で母校に入学いたしました。高校2年生の時に2年間休学、都合8年間母校に在籍いたしました。いよいよ就職の時期となり、悩んでいたところ、担任の石原先生



奥手稲山でのスキー。右端が本人

から「三井銀行を受けに行きなさい」と言われ、「駄目三」と思い入行試験に行きました。

受験者は10数名、最後に3名残り、身元調査の末？私一人が入行できました。本当にラッキーでした。小樽支店では、銀行支店長の配慮により小樽商科大学の夜間部に入学でき、無事卒業できました。その後は札幌支店へ。営業において「預金増強のオリンピック作戦」の名のもとに、全行員1万人の預金集め競争が始まり（6カ月間）運よく、全国1万人中第2位となりました。その後本州へ転勤。多摩支店では、新規開店に係り、成田では新規開店の支店長として、最後は横浜の上大岡支店長を務め、53歳で定年、後関連会社へ12年間勤め、小さいながら自分の会社を立ち上げ20年間、85歳まで働き、現在87歳になりました。

当会の元会長古山さんには、

高校2年の休学後、特にお世話になりました事、心より感謝申し上げます。

最後に今後は田中・村井両副会長のもと末永く東京尊商会が継続することを期待しております。

「絆」の思いを強くしてくれた コロナ禍

41期 島 久雄



新型コロナウイルスの世界的流行から、約

5カ月の巣ごもりで人との出会いに渴望して一人で生きる難しさから「絆」についての思いを強くしてくれたコロナ禍です。

日本での流行は、それほどでもなかったようですがスペイン風邪の経験から専門家は、これから2波、3波があると迎え撃つ準備をしているの頃です。小樽も全国的に有名になりましたね。昼カラオケで、道内でのニュースが無かった小樽が不名誉なことですが、久しぶりに注目されました。初めての体験の巣籠りは、都道府県、観光地への移動自

粛から観光小樽の経済、市民はマスクを探しながらの新しい生活をさせられました。東京都のステイホームは、3密を避けて人と会わないことから家の中で過ごす難しさも出たようです。

ある生命保険会社の家庭内の意識変化についてのアンケート結果では、ステイホーム期間中の子育て、夫婦関係、介護でイライラする事が多く家庭不和となり普段から家族の話し合いをすることが大切としていました。在宅勤務でのテレワークは、人との直接会って仕事をする習慣だった事で苦労したようですが、この体験はこれからの働き方改革の一つとして一部は続けて行くことになるようです。

巣籠りで頭が休んでいるところに、麦笛の原稿依頼があり、「学生時代の青春の思い出」とのことでしたが、青春は既に遠くなり、緑陵時代は、親と担任から受験、受験と追いかけて、反発もあって出来の悪かった勉強以外思い出すことも無く大事だった青春時代を粗末に過ごし、友人との「絆」で思い出もなく、振り返ると虚しさを感じます。

そんな中、天狗山の新緑、薫春小鳥と戯れ、ヨモギ・ワラビの新芽を摘み、ブドウのツルを渡り歩いた夏、クリ・オンコの実を食べた秋、雲から白に凍れる冬、リフトのない頂上へスキーを担いで登って、今の体力の基礎を作ってくれた天狗山が私を育ててくれました。学生時代の「絆」のなさを反省して「同窓会の世話話をしなければ」と、11期の中田乙一会長の時、会の下働きをしました。三菱地所社長で、立派な先輩に出会った最初の「絆」でした。総会案内状の封入作業などは、大手町の三菱地所本社の会議室で社長秘書にも手伝ってもらい、緊張しながらの作業が懐かしく思い出されます。帰りには、お菓子のお土産付きで、心配りと人柄の優れた中田先輩が誇りで、周りの友人に良く自慢していました。中田会長の次の19期の井原会長の時に41期当番幹事で総会の運営を担当し、長年「上野宝ホテル」での総会は、建て替えから、19期の上野地区で活躍されていた榎本先輩の紹介で「上野精養軒」に会場を変え、同窓生300人を集め、立食から、



着席にしたことで皆さん大変喜んでもらいました。

当時努力された先輩たちとの「絆」を結び、感謝の気持ちでご恩に報いたいとの思いから今日まで来ることが出来ました。ご承知のとおり昨年末に100年の歴史を刻んだ母校が閉校になり、尊商会小樽本部では、「母校がなくなつたのであれば、続ける意味がないのでは」との意見と「学校がなくなつても、OB・OGがいるので存続させることが大事」と言う方々がいました。東京尊商会は「同窓の絆」の旗のもとに出会う機会を続けられることを願います。

「同窓の絆」の旗(写真右)は、2011年10月に東京尊商会60周年を記念して製作し、総会で披露しました。この年は東

日本大震災があり全国各地から東北にボランティアが、駆け付け、助け合いの精神で災害救助活動が行われ「絆」の言葉が多く語られ、日本人の心に海外から大きな評価を受けたことは、記憶に新しいことだと思います。この年に諸先輩から歴史を積み重ねて60周年を迎え、後輩の増えない東京尊商会の継続を考えたとき、この「絆」を大切にしていきたい思いからでした。年1回の総会も堅苦しい会ではなく気軽に同窓が集まり、楽しく「絆」を深める「同窓の絆」の会としました。そのシンボルとして旗を作り、毎年掲げて来ました。今年はコロナ禍の環境から皆さんの健康を考えての休会ですが、来年10月を目指して、この1年をお互い元気で一日一日を大切に過ごしていきたいでしょう。

尊商会入会式に出席して

41期 中村みのり



令和2年2月28日小樽商業高校最後の103期生を迎えて行われ、「尊商会新入会員歓迎会」に出席しました。通常であれば、最後の卒業

生69名を迎えて、晴れやかな入会式が行われるはずでした。

私が実家のある札幌に着いたのは26日夕刻で、コロナ発症により北海道は、直前に緊急封鎖宣言が

されていきました。翌朝、尊商会事務局長に連絡を取り、「歓迎会は大幅に縮小されると思うが予定通り実施する」とのことでしたので、28日は久しぶりの雪の中を早めに家を出ました。

60余年振りの雪の地獄坂は、今は小樽駅前から商大までバスが運行されているため初めてのバス通学でした。駅前通りからの坂道は長く、地獄坂の標識がある所（昔はなかった？）からも、左右の景色はすっかり変わり、まるで記憶がないまま正門前に到着してしまいました。

広い校舎は、やはり静まり返っていました。会場の広い体育館には、この日の主役の卒業生がパラパラと席に着いているだけで、迎えるはずの先輩会員の姿はありませんでした。

会は、大森会長から歓迎の



言葉があり、記念品贈呈、新会員の挨拶がありました。最後に校長先生から激励の言葉を頂いて、会は静かにあつけないで終了いたしました。

出席は、本部役員の

村井副会長・土田副幹事長（札幌尊商会会長）と御一緒致しましたが、これから会員になる若い皆さんと懇談しながら、札幌に、東京にお誘いしたかったと、残念な思い出だけが残りました。

3月1日には、最後の卒業式が実施されましたが、こちらにも在校生・保護者・来賓は、すべて不参加に、となりましたので、残念ながら寂しい卒業式になったようです。

103期生、伝統ある小樽商業高校の最後の卒業生を尊商会に迎えることが出来ましたので、「東京へも是非」とお誘いしましょう。

思えば、昭和30年（1956年）冬、入試発表確認のため、深い雪の中を必死で上り、友達と喜びを分かち合ったのが地獄坂との最初の出会いでした。試験場は中学の教室、同級生と一緒に模擬試験の様

でしたから、緊張感もない入試でした。学区制で決められていた緑陵高校との出会いも初めて、合格後に通学路を探す事から始めて、3年間の地獄坂との付き合いになりました。元氣な間に是非歩いてと

して大いに利用されていたのでこのえんばくの「ばく」が使われたのではと推測しています。

当時の子供たちの主要な遊びであったのですが、現在の子供の出生数が1949年（昭和24年）2,696千人、2019年（令和元年）864千人とピーク時の約32%で、遊びもスマホでのゲームが主力のようで、江戸時代の人々はなんと思ふかと余計な心配をしていますが。

麦笛

（むぎふえ、ばくてき）の調べ

42期 市川東紀宗



校歌の一節にある「麦笛の節面白きかな揺籃の夢」は古くから世界中にある麦の茎から、日本でも子供たちが手作りで作った麦笛を吹いて遊ぶもので、ピーピーと澄み切った麦笛の音は大へのどかな春（初夏）の田園風景でした。出来上がった笛はどれもこれも音色が違うので、5、6人が違った麦笛を作つて、ドレミファ……と楽器の様に鳴らして得意になったものと本にありました。現在の日本では見かけませんが、校歌作曲の頃は各地で見られた風景と察せられます。

ばくてきと読むのは当時、麦の一種である燕麦が食用と

今、私達は学問に裏付けされた常識の中で生活をしています。月に着陸、電子顕微鏡でウイルスを見、人間の細胞に南極・北極が知れる程進歩していても病気になる人が絶えず、ガンは増えています。小宇宙といわれる人体に、常識が通じないのです。特に昨今の「新型コロナウイルス」禍は従来の生活習慣を変えるほどに影響を与えています。

ウイルス

は半生物的存在で単独では繁殖出来ないの
で、菌を宿主として活用しなければ



ば繁殖不能との事で、いま世界中がどの菌と合体しているか探っており、これが判明すればワクチンの開発も容易になると思われます。

それにしても世の中のテンポが早すぎて、付いていくのやつとで、懐旧の念すら忘れてしまいうでこれを何とかしなければ全てを忘れる病いの方が先にやってくるかも知れません。

“人は食べた物によって作られる”(ロジャー・ウィリアム博士、栄養学者、ノーベル賞受賞)と有名な言葉があります、結局は食べる物で菌やウイルスの入り込めない体を作る事が免疫力向上なのかも知れません。健康を得ることは、知識とお金と時間が懸かりそうです。

この早い世の中に竿をさす事は出来ませんので、せめてスローライフでもと思い、携

帯はガラ携、メールはノート型パソコン、隣の本箱には平凡社の百科事典、と極力電磁波から身を守る工夫をしています。電磁波による人体への影響はまだ結論は出ていませんが、将来的には生じそうな気がしますので、電磁波は距離の二乗に反比例するとの法則に基づいて接する所存です。

世の中は、助け助けられて、見えないところで繋がりがあい生きている、と言われているので麦笛(ばくてき)の校歌が何処に行こうが、麦笛(むぎぶえ)は無くならないので、それでよし!として、“恋しいのも人間、煩わしいのも人間”の格言をモットーに生きてゆきたい。

遠い昔の通学路
余市・蘭島・塩谷・小樽の海辺



55期

大高敏孝

余市町から、3年間

小樽までの

通学の思い出を書いてほしい

旨の連絡をいただいた。

45年前の出来事なので、記憶をたどるのは難しい。

入学のきっかけは、母校に情報処理科が新設されること、が地元中学の話題になり、兄の出身校ということに魅かれて受験した。

通学の最初は「国鉄」を利用した。路線は田舎で当然のこと単線だ。ディーゼル機関車か? 蒸気機関車か? 併用か? もはや定かではない。あの頃、小樽市内の高校が6校も7校もあり、地元の仁木や余市から小樽への通学者が意外と多かった。小樽には歴史と北海道の都会という少し憧れもあった。私は、人見知りだったので路線でも知り合いは数えるほどだったのだ、其のころの通学仲間の記憶は殆どない。

路線は、海辺を走り現代の鉄道マニアなら「海線」と称賛に値するのだろうか。しかし通学時の車窓の思い出は少ない。

一番の記憶は、真冬の吹雪の中の汽車通学。荒れた天候は、強風のためか積もった雪が海の波のように盛り上がった。海辺を見ると白い大



きな波が唸り声を上げているように感じる。この海の光景、何故か判らないがこの波の向こうに決まって小林多喜二の「蟹工船」で描写された荒れる海の光景と重なっていた。

車窓から眺める海の色は、どんより暗い雪雲を映し、変化する様は見る人を飽きさせない面白さがあつた。

また一番気に入っていたのは、雲の切れ目から射す一条の光が波にあたつた一瞬の光景だったかもしれない。一方で車窓の下は、強風と大雪で地吹雪のような荒々しさから、鋼鉄の車体さえも揺るがす力を感じていたのだろうか? そのころ感じた通学路線の自然がどのように、今でも残っているのか、どう変わったのか? 今は想像出来ない。機会があれば冬の季節にのんびりと訪れて視たいところである。

2年の頃からは、バス通学の機会も多くなり、余市駅から少し離れたバス停からの乗車だったように思う。地元と言えば「中央バス」だった。

より海辺を走るバス通学でいつも気になるのが塩谷駅から見ると海側だったか、「伊藤整」の文学碑だ。はじめそれが何の碑なのか気づかなかった。伊藤整と気づいてこの時初めて彼の作品を読んでみようと思った。その後10年ほど、その文庫本を見つけたと、何となく読んでいた。残念ながら、内容は断片的にも思い出されるのは、如何ほどもない。

特に通学の風景を思い出す機会は、ここ長い会社勤め、病氣等から少なかった。

青春の時期の記憶は、美化されがちと言われます。それが真実か? 夢の中か? もはや私の年齢では定かではない。だが、情報処理の道にのめり込み、生涯ITを経営と現場に活かす道を歩めたことになった母校に感謝しております。

今また、身近な気になるとに興味を持つことを大事にしていきたい。

今までの 東京尊商会 同窓の絆 PHOTO



2019年度(令和1年度)東京尊商会活動報告

- 4月13日 役員会(日昭電気会議室)
 6月8日 役員会(日昭電気会議室)
 6月22日 尊商会本部総会
 8月17日 役員会(日昭電気会議室)
 「同窓の絆」案内状発送作業
 『麦笛』第31号発行
 10月19日 役員会(日昭電気会議室)
 10月26日 東京尊商会「同窓の絆」
 (東京ガーデンプレスH)
 12月14日 第五回役員会(日昭電気会議室)
 「同窓の絆」報告書発送作業

事務局へのご連絡は
 浜谷哲男 TEL (FAX) [REDACTED]

会員の住所変更など、気軽に相談下さい。
 ご意見大歓迎!

2019年度(令和元年度)会計報告(案) 平成31年4月1日～令和元年3月31日 (単位:円)

収入の部			支出の部		
項目	内訳	金額	項目	内訳	金額
繰越金	前期より	751,745	支出計		979,928
	普通預金	174,128	総会費	ホテル雑費用	644,300
	郵便当座預金	576,344		総会案内等印刷、発送費等	119,966
	手持現金	1,273		会報費	51,623
収入計		660,001		会誌費	75,229
総会会費	¥7000×82名	574,000		事務用品費	18,583
	総会等寸志	40,000		HIP管理費	20,297
年会費	協賛分246名	246,000		手数料	39,921
	会場分含む			慶弔費	10,000
その他収入		1	繰越金	次期へ	631,818
				普通預金	247,773
				郵便振替	382,423
				手持現金	1,622
合 計		1,611,746	合 計		1,611,746

上記の通り報告します。会計・浜谷 哲男
 上記の通り間違いありません。監事・土橋 弘幸 監事・村松 次男

編集後記

これは、高校時代の寮生達に春早々に出した手紙です。新型コロナウイルス感染症で世界が麻痺しており、思い出に慕ってばかりおられませんか。自粛の中、身の回りを整理し、古い資料が出てきて懐かし、友人にその旨を伝えたく手紙を書いたものです。

早春の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。東京・千葉近隣 桜が満開になりつつあります。植木の芽が膨らみ春本番です。庭のチユーリップも満開です。

暇になり、写真を整理していたところ、小樽緑陵高校の受験時の合格通知並びに北海道新聞にも合格者一覧表の記事があり、色も茶色になり乾いた状況でありました。成績の順ではなく受験番号順での名前と思われる。

一番最初に現在稚内在住の土田さん、木古内在住小泉さん、梅田さん(1年の時同じクラス利尻出身)、札幌?遠藤さん、坂口(千葉四街道市)さん、札幌中内さん、中湧別石塚さん、中湧別森さん、札幌大久保さん、藤沢さん(弟さんが当方の町内に住んでいます)……新聞掲載途中、中ほどで、札幌大高さん、千葉船橋市藤森さん、札幌仙北谷さん、埼玉戸田市小林さん、札幌根井さん、函館?斎藤さん、寮生のメンバー総ぞろい……非常に懐かしく感じました。50数年前の出来事です。

また、学校の雑誌『蒼穹』があり、当時の舎監・田村重見氏の寄稿文がありました。

我々が1年生の時と想像されます。いま、読むとただ懐かし、一緒に暑いところ汗を流して、サッカー・ソフボール寒いときは、サッカー・バスケットボール暇さえあれば食堂で卓球……

勉強時間は意外と少ない(当方のみの話、他の皆さんは、本を読んだり、ソロバンをはじいたり?) 個々の個性が、それぞれあり、人の好きは生まれ家族環境によるものと、推察します。

本業が専業農家は、私だけの気がしますが、多くは公務員系か、商店主系……根井さんは、礼文の専業漁師さんでした。

兄弟・親戚で寮生も多く、我が家も3人お世話になりました。日高平取の藤沢兄弟も歴史ある兄弟です。優秀な藤森兄弟等々、昔は、優秀な生徒がたくさんいたようです。

学校長・渡辺羊三氏の「校名変る」の寄稿文に、緑陵50年の歩みに明治45年に認可。庁商……冊子をもらったときは、中をよく見ていなかったようです。

今読むと、りっぱな学校だと感じます。もっと、勉強していれば……「大好きなタラレバ」です。

村井健 51期

写真投稿歓迎

ふるさと小樽のエピソードを添えた写真をお送り下さい。
 あて先は『麦笛』題字下の村井まで。メール投稿歓迎します。